切られた。我等は、曾て日本の國民性を信じ、日本の上層階級の道義心に期待した。しかし斯らそれによって勞働階級の解放も向上も期せられない。行詰れる經濟組織の改革も、日本國家のために何等棄身の躍進も見ることが出來なかった。

普通選擧は、また我等に絶望を與へた。依然として黄金がソレを支配することを知つたのである。而して共産主義、サンジカリズム、社會民主主義、アナキズム、國家社會主義、ファシズムは日本の勞働者をして一警察者の前に於けるモルモット以上のものとはせず、勞働階級の先進分子たる組織勞働者は、コノために對立抗爭、七花八裂の惨を極めたのである。

この渦中に悩む勞働階級は、昭和六年九月十八日の滿洲事變を契機として抬頭せる反資本主義的愛國運動に、また期待するところがあつたのである。然るに之亦資本の攻勢を受け、骨抜きとなり昭和七年末より次第に衰退を續けつゝある。

しかし斯ら見よ、之等特權階級の死力を盡しての攻勢また攻勢によって幾度か我等の陣營は後退を余儀なくされた。それにも拘らず、資本主義は次第に崩壞の過程を

辿ってゐるではないか。しかもかすかに響く我等の進擊の行進喇叭は既に力強く我等の耳朶を打ちつゝあるではないか。

我等は過去の輕佻浮薄を斥けて、飽く迄も堅實に進まなければならぬ。我が日本勞働組合總聯合の如き、既に早くよりその点を指摘して、嵐を衝いて來たのであるが、今や進擊の門出に當り、益々我等の使命重大なる感慨するものである。即ち我等は強烈なる戰鬪的精神を養ふと共に、また産業人としての自覺を深めなければならないのである。

勞働者が産業人としての自覺がないならば、資本家の搾取は猛擊し得ても、自ら代つてその經營の局には當り得ないのである。勞働組合運動は飽迄も自主的に確信に満ちる運動でなければならない。生産者としての充實した信念こそが、初めて勞働條件の維持向上は勿論、その根本的な改革の迫力となるのである。

我等は最早や空疎なるデマゴーグの言葉に惑はされることなく、只管産業人としての自覺を深め『勞働組合主義の徹底』を期し進んで、なほ統一ならざる日本の『勞